

ハンドボール競技における右利きバックコートプレイヤーのシュートに関する一考察 ～左バックコートプレイヤーと右バックコートプレイヤーにおけるプレーの比較から～

氏名 中里 栄二 (200812010、ハンドボール方法論)

指導教員：會田 宏、河村 レイ子

キーワード：右利きバックコートプレイヤー、ボール保持前の動き、ボール保持中の動き

【目的】

近年のハンドボール競技では右バックに左利きが配置されることが多い。それは左利きは右バックではセンターバックとクロスをしてシュートを打つ場合に有効なシュートが打ちやすく、シュートフォームから左バックやポストにアシストパスすることが可能になるからである。しかし、チームに左利きがない場合には右利きが右バックのポジションをせざるを得ない。大学レベルや高校レベルではそのようなチームが多い。そこで本研究では、右利きの右バックポジションでのシュートプレーの特徴を明らかにするために、右利きが右バックポジションでプレーした時と左バックでプレーした時の違いを明らかにする。次に右利きの右バックポジションでのシュートプレーを学生、日本、世界レベルで比較する。

【方法】

学生、日本、世界レベルのゲームが撮影されたDVDを再生し、右利きプレイヤーが左バックおよび右バックから打ったシュートを観察した。観察項目は、DFの位置、ボール保持前の動き、体勢、DFとの関係、ボール保持中の動きの方向、ドリブルの有無、フェイントの有無、歩数、ステップパターン、シュートタイミング、フォワードスイング、DFへの対応、シュート結果であった。左右バックでのプレーの違い、レベル別に見た右バックでのプレーの違いを明らかにするためにカイ2乗検定と残差分析を行った。

【結果と考察】

1. 観察項目とポジションの関係

右利きがプレーするポジション(右バック、左バック)と観察項目との間に有意な関係があったものは、体勢、歩数、シュート時のステップパターンの3つであった。体勢に関しては、右バックでは正面または利き手側がゴールに向いている傾向が認められ、左バックでは非利き手側がゴールに向いている傾向が認められた。歩数に関しては、左バックでは助走に3歩使う割合が有意に多いことが認められた。シュート時のステップパターンに関しては、右バックではランニングシュートが有意に多く、左バックでは有意に少ないことが認められた。一方、DFの位置、ボール保持前の動きの方向、DFとの関係、ボール保

持中の動きの方向、ドリブルの有無、フェイントの有無、シュートタイミング、フォワードスイング、DFへの対応、シュート結果については左右のバックポジションに有意な差は認められなかった。

2. 観察項目とレベルの関係

学生、日本、世界レベルの間に有意な差が認められた項目は、歩数とシュートタイミングの2つであった。歩数に関しては、世界は1歩の助走が有意に多く、日本は3歩の助走が有意に多いことが認められた(表1)。シュートタイミングは、世界ではクイックが有意に多く、日本はノーマルが有意に多いことが認められた。一方、DFの位置、ボール保持前の動きの方向、ボール保持の瞬間の体勢、DFとの関係、ボール保持中の動きの方向、ドリブルの有無、フェイントの有無、ステップパターン、フォワードスイング、DFへの対応、シュート結果についてはレベル間に有意な差は認められなかった。

表1 歩数とレベルのクロス表

	学生	日本	世界
1歩	1(2.5%)	0(0%)	6(15%)*
2歩	13(32.5%)	4(10%)+	10(25%)
3歩	26(65%)	36(90%)*	24(60%)+
合計	40(100%)	40(100%)	40(100%)

カイ2乗値=16.407, p<0.05

*…有意に多い(p<0.05)

+…有意に少ない(p<0.05)

【結論】

右利きが右バックでプレーする場合、利き手側には歩数を減らしてシュートを打ちにいき、その時のシュートタイミングはクイックで打つほうがよいことが明らかになった。また、右利きが左バックでプレーする場合、利き手側には広いスペースがあるため歩数を多く使い大きく移動し、DFをかわしてシュートを打つほうがよいことが明らかになった。さらに右バックと左バックともにシュートはバリエーションを増やし、ステップパターンも有効に使い相手DFやキーパーを欺くような技術を身につける必要があることが明らかになった。